

進行中のプロジェクト

南小国町営 杉田団地・矢津田団地

既存の町営団地建て替えを目的に、平成13年に着工した南小国町営杉田団地・矢津田団地。1期では、矢津田団地16戸、2期(平成14年度)では矢津田団地4戸、杉田団地16戸と集会場、3期(平成15年度)では杉田団地14戸と、4期(平成16年度)の杉田団地6戸まで工事を重ね、平成17年3月、計56戸・集会場の竣工により、プロジェクトが完了する。



4期工事を終え、いよいよ完成。



受賞紹介

2004年日本建築学会作品選奨受賞

西合志町保健福祉センター 「ふれあい館」



建築に関する学術・技術・芸術の進歩発達をはかることを目的とする社団法人日本建築学会が、その年の作品選集の中から、特にすぐれた作品に贈る「日本建築学会作品選奨」を西合志町保健福祉センター「ふれあい館」が受賞した。

第9回公共建築賞・優秀賞

県立あしきた青少年の家



公共建築のレベル向上を目指して、2年に一度、優れた公共建築等に贈られる「公共建築賞」で、優秀賞を県立あしきた青少年の家が受賞した。

kumamoto artpolis news 30



特集 くまもとアートポリス Kumamoto Artpolis

2004



●インタビュー

コミッショナー 高橋 航一氏
バイスコミッショナー 伊東 豊雄氏

●講演会・シンポジウム

- 展示会
- 見学会
- 協賛事業

●TOPICS

- 竣工プロジェクト
- 進行中のプロジェクト
- 受賞紹介

世界へ、地域で、いきづく建築文化。

くまもと アートポリス 2004

16年を経過し、この4年間を振り返る
KUMAMOTO ART POLIS 2004

1988年にスタートし、2004年で16年を経過した「くまもとアートポリス事業」。

地域全体で建築文化を発信し続けるという取り組みは世界で注目されているだけでなく、

地元の建築を志す若者たちにも影響を与えている。

2004年秋に、4年に一度の「くまもとアートポリス2004」を

「ユニバーサルデザイン展」と併せて開催した。

くまもとアートポリス2004. インタビュー Interview

「くまもとアートポリス2004」を開催するにあたって、
高橋 誠一 コミッショナー、伊東 豊雄 バイスコミッショナーに、
「これまで」そして「これから」の
くまもとアートポリスについて、話を聞いた。

これからのアートポリスは「点から面へ」。 地域性を重視しながら、グローバルな存在へ——。

くまもとアートポリスコミッショナー 高橋 誠一氏

—4年間の総括として、今回のアートポリス事業を振り返ってみてどうですか？

この4年間は、地域性、地域の中にある文化性をテーマにしたものが多かったように思います。アートポリス前半の10年は、その当時一流の建築家によって手掛けられましたが、地域の人にとっての建築の概念と馴染まないものがいくつかありました。

その点、例えば、藤森さんの「熊本県立農業大

学校学生寮」は面白い取り組みでした。最初から彼が大学の中に飛び込んで来て、夜を徹して先生や学生さんと話をした結果、面白い形が出来てきたんです。対話しながらつくる「私たちのまちづくり」の原点がありました。それは熊本の風土と、喜んで受け入れてくれる地域の人々がいたからこそ。このことが僕はものすごく嬉しかったですね。

確かにアートポリスは、熟成するのに時間がかかりますが、続けていくのが何よりも大事だと思

TAKAHASHI
TEIICHI



います。地域文化の中にある建築や、それをさらに発展させるような建築を引き出していく。時間がかかっても、そこに住む人々のために、いろいろな作業を尽くしていくことが、建築にとって改めて大事なのだと思いました。

—今後のアートポリスについてはどうお考えですか？

新八代駅前にある乾久美子さんの作品「きらり」には、建物自身に説得力があり、地域の人にも受け入れられています。このような若いエネルギーとデザイン力を、今後も見極めていかなければならないと考えています。

建築は揺らぎの時代を迎え、世界中が建築の形を模索してきました。今後はそれが一つのスタイルにまとまらず、発散の方向へ行くかもしれない。そして、熊本らしい発散というものがあると思います。熊本のまちにアートポリスの力が及んでいくようにしたいですね。

これからの課題を一口で言えば「点から面へ」という展開。点だった建築が、面に広がるための影響力を持っていくことが大事です。

—最近は韓国などからアートポリスも注目を受けていますが…。

韓国には今後“ニューアートポリス”をつかって、熊本を追い抜くような力を持ってもらいたい。熊本にとっても、大きな影響を与えたいと思います。熊本県下においても、さらに韓国や中国などに対しても影響力を持つという意味で、点から面へということが言えると思います。大きな期待を持っています。

—「熊本らしい建築」という点についてはいかがでしょうか？

今の時代、コミュニケーションの形態が「同時性」を求めるようになりましたが、それは世界中どこにでもあります。同時性の中に差異を求めることが、非常に大事だと思います。地域性を持たない同時性というのは意味がない。熊本の地域に根ざした考え方を失っては、日本にある一都市というだけで何の意味も持たなくなります。熊本にある自然や風土、歴史などを大事に守りながら、その良さをアピールすること。熊本は地理的にも文化的にも、歴史的にも特殊なものがたくさんあるんだから、地域性を手放さず、その違いを作り上げていかなければならない。差異こそが人々の目にチャーミングなものとして映るんですよ。

グローバルな世界であるからこそ、熊本としての個性を出していかなければならない。熊本がアイデンティティや自己主張を持つまちになることを願っています。

地元の人々と建築家が 一体となることが、 新しい地域性を つくっていく。

くまもとアートポリスバイスコミッショナー 伊東 豊雄氏



ITO TOYO

—この4年間のアートポリス事業を振り返ってみていかがですか？

経済状況の悪化もあり、プロジェクト数自体はそんなに多くはありませんが、西沢大良さんの砥用町林業総合センターや岡部憲明さんの一の宮

オープニング式典

11/25

くまもと県民交流館「パレア」

アートポリスは韓国と熊本の新しい架け橋。

オープニング式典では、来賓の釜山広域市副市長・金丘炫(キム クヒョン)氏が「熊本と釜山が建築に関する協力体制を構築し、アートポリスが両国の建築に貢献するきっかけになることを望んでいます」とあいさつ。くまもとアートポリスコミッショナーの高橋 訥一氏は「アートポリスとユニバーサルデザインの建築は、地域に深く根ざしているという意味では同一。この2つがこれからどのようにリンクしていくのが楽しみです」と述べた。最後に、来賓の金仲率(キム シンジェ)氏が、「2004年釜山国際建築文化祭の国際コンペで、日本の建築家・山下保博さんが最優秀賞を受賞したのは大変素晴らしいこと。アートポリス関係者の方々にも参加いただき心より感謝しています」と締めくくった。

韓国と熊本の建築を通したさらなる交流が期待される式典となった。



「世界の建築家たちの関心を集めるアートポリス事業は、都市計画の新しいモデル。大変関心を寄せている」と来賓あいさつを述べる釜山広域市副市長・金丘炫(キム クヒョン)氏



「住民と行政、建築家、この3者が一体となって地域の活性化に取り組んでいきましょう」とくまもとアートポリスコミッショナーの高橋 訥一氏



4年前から取り組んでいる「釜山国際建築文化祭」の執行委員長を務める金仲率(キム シンジェ)氏

くまもとアートポリス 2004

今回の「くまもとアートポリス2004」では、講演会や学生たちとの建築フォーラムをはじめ、展覧会や見学会など多彩な催しが行われた。また、さまざまな団体などによる協賛事業も開催された。

オープニング式典 [11/25]

オープニング講演会 [11/25]

伊東豊雄・乾久美子講演会
—八代まちづくりデザインコンペ— [10/24]

建築フォーラム—僕らの学校— [11/1]

くまもとアートポリス展 [11/17-29]

銀座展 [9/28-10/3]

ストリート展 [11/25-28]

アートポリス見学会 [10/9] [10/31] [11/3]

●協賛事業

熊本市現代美術館建築シンポジウム [11/28]

イ草和紙での作品展 [11/23-28]

建築無料相談会と作品展 [11/25]

第6回JIA熊本住宅賞作品展 [11/26-28]

韓国慶尚南道・熊本県建築士会による
くまもとアートポリス見学会 [11/24-26]

県民ふれあい教室 [10/23] [11/6]

えですか?

仙台市の「せんだいメディアテーク」の設計を担当した5年間で感じたことですが、建築において、その土地の伝統的建築を表面のみで踏襲することは、地域主義を守ることで決してないと思います。地元の人々と建築家が一体となって、その土地でしかできないものを創ることが、これからの新しい地域性ではないでしょうか。

最も大切なのは、現代建築を創っていくという長い視野に立って、「世界で熊本にしかないものを創るんだ」というエネルギーや意気込みだと思います。そうして住民の皆さんに、新しい建築ができることがまちにとって素晴らしいことだと認識してもらえるようになればうれしいですね。

PROFILE



くまもとアートポリス
コミッショナー

●建築家

高橋 訥一
TAKAHASHI TEIICHI

1924年 中国・青島市生まれ/1949年 東京大学第二工学部建築学科卒業/1960年 第一工房設立・代表取締役/1967~95年 大阪芸術大学教授/1995年 大阪芸術大学名誉教授
[作品] 佐賀県立博物館/大阪芸術大学/東京都立大学キャンパス/全労済情報センター/パークドーム熊本/群馬県立館林美術館ほか
[受賞] 日本建築学会賞(作品)(1971年・1982年)/芸術選奨文部大臣賞(1979年)/日本芸術院賞(1982年)/建築業協会賞(1992年・1997年)/村野藤吾賞(2004年)ほか



くまもとアートポリス
バイスコミッショナー

●建築家

伊東 豊雄
ITO TOYO

1941年 京城生まれ/1965年 東京大学工学部建築学科卒業/1965~69年 菊竹清訓建築設計事務所/1971年 URBOT設立/1979年 伊東豊雄建築設計事務所名称変更
[作品] 笠間の家/シルバーハット/八代市立博物館・未来の森ミュージアム/大館樹海ドームパーク/せんだいメディアテークほか
[受賞] 日本建築学会賞(作品)(1985年・2003年)/第33回毎日芸術賞(1992年)/芸術選奨文部大臣賞(1997年)/日本芸術院賞(1999年)/ヴェネツィア・ビエンナーレ金獅子賞(2002年)ほか

直売所「四季彩いちのみや」など、一つひとつの建築のクオリティは非常に高くなってきていると思います。西沢さんは全身全霊をかけて取り組んだ今回の作品で見事に花開きましたし、岡部さんの作品も阿蘇の自然に溶け込んでいて素晴らしいですね。また、乾久美子さんの「新八代駅前モニュメント」も、小さなプロジェクトですが、現代建築のひとつの方向を暗示していて新鮮に感じられます。

—今後アートポリスが果たすべき役割についてどうお考えですか?

これまで建築は、建築家の閉ざされた世界のなかだけでつくられてきました。しかし、一般市民の方々にも参加してもらい、たっぷり時間をかけて創り上げていく“私たちのまちづくり事業”のような形で進行していけば、地元の方々の理解も得られるのではないのでしょうか。

そして、これまでの実績のもと、地元の方々に納得してもらえるような、そして熊本だけでなく、日本、さらにはアジアのモデルになるような建築を創造していかななくてはならないと思っています。これまで以上に、人々に建築を知ってもらう努力が必要になってきますので、一層の力を注いでいきたいですね。

また、モノを創ること以外に、子どもたちのための建築ワークショップを開くなど、インスティテューション的な機能も果たせれば、建築の理解にも役立つのではないのでしょうか。

※注:研究所、会館、学会、協会などの意

—最近、韓国などからもアートポリスが注目されていますが。

韓国も若い世代の建築家が育ってきて、いい作品が生まれています。くまもとアートポリスにも大きな関心を持っているようです。今後は熊本県の大学生が企画、運営するような、地域で開かれる小さな催しに参加したり、アートポリスの作品づくりに加わってもらえるようになってくれば、本当の意味での交流ができるのではないのでしょうか。今後は、韓国と建築について語り合う場を積極的に設けていくことが重要だと思います。

—今後の熊本の建築の在り方についてどうお考

建築文化を広げる。

第10回くまもとアートポリス
推進賞表彰

式典の後半で、第10回くまもとアートポリス推進賞の表彰を行った。全50施設の応募の中から、くまもとアートポリス推進賞を「九州新幹線新水俣駅」(水俣市)、「S.W.H」(南阿蘇村・旧長陽村)、「田迎の家」(熊本市)の3施設、くまもとアートポリス推進賞選賞を「東海大学付属第二高等学校」(熊本市)、「ひだまりのまちB⁴」(宮原町)の2施設が受賞した。



撮影／(株)アイオイ・プロフォート
九州新幹線新水俣駅



S.W.H



撮影／吉田誠
田迎の家

オープニング講演会

11/25

くまもと県民交流館「パレア」



見城 美枝子氏
(青森大学教授)

TBSアナウンサーを経てフリーに。現在、青森大学社会学部にて教鞭をとり、建築社会学、メディア文化論、環境保護論を講義している。テレビ番組への出演の他、エッセイスト、ジャーナリストとしても活躍中。

<現在就任>

- 日本リーダー養成協会理事長
- 国土技術政策総合研究所研究評価委員会(国土交通省)
- 食料・農林漁業・環境フォーラム幹事
- 公共建築賞審査委員会委員 他多数

皆が県民意識を持ち、
夢のあるアイデアにも皆で取り組む

皆様こんにちは。くまもとアートポリス事業により、毎年素晴らしい建築物が建っていますね。景観をつくることに對し、腰を据えた長期的な計画を立てていることに感動しています。というのも、最近各県がどうしたら自分の県のイメージをつくれるか、県民意識が薄れているような気がするからです。

夢のあるアイデアを夢のままに終わらせたら、景観づくりはできません。誰かが「やってみよう」と言ったら、いろんな分野の人たちがアイデアを出し合っていくことが、新しい景観をつくっていくうえで、大変重要です。一つの発想に対して「面白い」と興味を持つ人がどれだけいるかによって、美しさや優しさのある景観づくりができると思います。

地域性を理解したうえで
公共建築の空間づくりを

熊本には熊本の歴史や伝統、培ってきた庶民の生活があります。この土台に公共建築がつけられ、県の景観となり、まちづくりにつながって、時間とともに現在から未来へと変わっていきます。

「魅力ある建築—美しさと優しさのデザイン」



例えばよそから著名な建築家が来たから素晴らしい建築をつくってくれるかという、必ずしもそうではありません。その建築家が、その土地の歴史や人情をあまり知らなかった場合、土地になじまない建物ができてしまい、自分がどこにいるのか分からない「県」になってしまいます。

建築の計画に入る前に、地域性や郷土意識、歴史を知って、それをベースに建築を考えてほしいですね。そうすれば熊本県はこうあるべきだという意識をしっかりとって公共建築、まちづくりに取り組んでくれると思います。

また、私は以前から天水町からミカンを取り寄せていますが、どんなに美味しいミカンを作っても、それを知って買ってもらえなければ農業を続けていけなくなってしまう。そうすると里山のたたずまいが変わります。産業のあり方や暮らしが変わると、風景が変わっていくのです。そういう意味では、農業・林業・漁業など食料を生産する側と県との関係も重要だと思うのです。

美しい景観を残すために
"民設公営"の意識を持って

かつては日本各地に農村の美しい景観が広がっていましたが、都市開発が進むにつれ、農村の

景観が破壊されていきました。ようやく環境建築という言葉が生まれ、景観を残そうという動きが出ています。美しい景観を残すために必要なことは何でしょうか。公設民営の逆の発想で、「民設公営」という意識を持ってみてはどうでしょう。一般に行政主導で造ったものは公設民営。でも実際には公は公、民は民と分けられない部分が出てきます。公設民営の落とし穴は「公設だから関係ない」「お金を出してないからどうでもいい」と思ってしまいがちなこと。だから、公と民が一体となってお互いのできることをやっていくことが重要です。「民設公営」の意識が高まってくれば、景観は保てると思います。

私は公共建築賞の審査委員もしていますが、「公共ってなんだろう?」とよく思います。公共だからといって行政だけが守り運営していくと先細りになります。なぜなら誰のものでもないからです。「みんなのもの」は「誰のものでもない」とならないよう、景観づくりにみんなで参加したら違ってくると思います。アートポリスは地域の景観を基盤として、その魅力が生きてくるのではないのでしょうか。

アートポリスが成功することを心より祈念しています。

伊東豊雄・乾久美子講演会

—八代まちづくりデザインコンペ—

10/24

やつしろハーモニーホール



審査員には、伊東豊雄 バイスコミッショナー、乾氏のほか、建築家の曾我部氏、(社)熊本県建築士会八代支部長の村上氏、八代商店街代表として江上氏が参加

夢や未来を語り合い、私たちのまちができていく。

新しい商店街の使い方を考える

「第17回熊本県民文化祭」とタイアップして、「八代商店街再開発計画・八代まちづくりデザインコンペ」と「伊東豊雄氏・乾久美子氏による講演会」を開催。

まずは「これからの八代のために“新しい商店街の使い方”を考える」をテーマにした公開コンペからスタート。県内外から寄せられた53点の応募作品の中から10点が1次予選を通過、伊東氏、乾氏ら審査員5人により、最優秀賞に熊本大学大学院生・高橋大さん・室靖大さんの作品「カイホウク」、ほかに優秀賞2点が選ばれた。

最優秀作品は壁を取り払った、ユニークなデザイン。伊東氏は総評で「人がどう動くか見てみたい」と評価。

その後、伊東氏による総評を兼ねた講演、乾氏による自身の作品紹介が行われた。



県内4つの大学生がコラボレートしたコンペティション

大学生の企画・主導で実施した「建築祭2004」。はじめに、審査員に伊東豊雄氏を迎え、県内4つの大学で建築を学ぶ学生たちが混成で8チームをつくり「豊水小学校建て替え計画コンペティション最終プレゼンテーション」が行われた。どのチームも、現場を視察し、ワークショップを開催しただけあって、周囲の恵まれた自然を生かした「地域密着型」の力作ばかり。

その後、「なぜ今そうであるのか？」をテーマに「建築フォーラム — 僕らの学校 —」が開催され、プレゼン模型を前に、伊東氏を中心となり審査を進行した。

プレゼンテーション、ディスカッションの結果、緑の丘を校舎の屋根にするという夢のあるアイデアが評価された「Pioneer」が最優秀賞を受賞、ほか優秀賞2点が選ばれた。伊東氏からは「最優秀賞は非常に夢がある作品。実現の可能性は低いかもしれないが、“子どもたちが思い描く理想像”のようところを評価したい。また、こうして4大学がまとまって取り組んだことや、現場へ出向き小学生らとワークショップをしたことが何より素晴らしい」との総評があった。引き続き、伊東氏による作品紹介があった。

大学生主導の企画「建築祭2004」。

建築フォーラム

—僕らの学校—

熊本大学工学部百周年記念館

11/1



フォーラムでは「学校建築のあり方とは?」「学校と社会の関わり方とは?」「学校が果たす役割とは?」など、多岐にわたるテーマで積極的に意見を交換

くまもとアートポリス展

11/17-29

熊本市現代美術館ギャラリーⅢ等(熊日会館びふれす3階)



「海外巡回展コーナー」では、海外巡回展で使用されているアートポリス映像を放映し、英文カタログなどを展示

アートポリス事業の軌跡をたどる。

世界でも、地元でも、影響力を発揮

高橋誠一コミッショナー、伊東豊雄 バイスコミッショナーらのインタビュー映像放映のほか、県立農業大学校学生寮、一の宮直売所「四季彩いちのみや」、砥用町林業総合センターの模型、最近のくまもとアートポリス参加施設を中心にパネルなどを展示。

ブラジルでのくまもとアートポリス海外巡回展の様子や、八代まちづくりデザインコンペ入選作品、熊大建築祭2004でのコンペの概要を紹介し、さまざまなところで影響力をもつアートポリスのパワーを感じさせる展覧会となった。



熊本の「今」を全国に発信

9月28日から10月3日まで、東京都の銀座熊本館2F くまもとサロンにて、くまもとアートポリス2004とユニバーサルデザイン展「銀座展」を開催した。

「文化」と「暮らしやすさ」を追求する熊本発の二つの取り組みを、広く全国に発信するために企画した展覧会には、約300人が訪れた。

期間中は、苓北町民ホールや砥用町文化交流センター「ひびき」、西合志町保健福祉センター「ふれあい館」など「対話」を通して造られた最近のアートポリス参加施設をパネルや映像で紹介。同じくユニバーサルデザインの取り組みについてもパネルや陶器などで紹介した。

「文化」と「暮らしやすさ」を追求する熊本の「今」を発信。

銀座展

銀座熊本館2Fくまもとサロン

9/28-10/3



最近のアートポリスプロジェクトを中心とした11施設のパネルを展示



ストリート展

下通りアーケード街 (パルコ熊本店前～ダイエー前)

11/25-28



当日は、韓国の釜山広域市および慶尚南道から行政、大学、建築士など100名を超える人が韓国のマスコミとともにアートポリスを見学

行ってみたい、私の好きなアートポリスの建物。



「生まれ育った町にある橋です」と話しながら足を止め、パネルに見入る人



どの施設に投票しようかと、すべてのパネルをじっくり読む人も



パネルと人気投票でアートポリスがもっと身近に

パルコ熊本店前からダイエー熊本店前まで、くまもとアートポリス参加施設やユニバーサルデザインの取り組み事例などのパネルを展示した。

パネルの総数は47施設84枚(最近の作品は「くまもとアートポリス展」で展示)。建築家からのコメントや施設の特徴などの分かりやすい説明があり、足を止め、熱心に見入る人の姿が多く見られた。

また、パネル展示された施設の中から「行ってみたい、私の好きなアートポリスの建物」投票も実施。500票を越す投票があり、人気のベスト3は宇城市(旧三角町)の三角港フェリーターミナル(通称:海のピラミッド)、山都町(旧蘇陽町)の馬見原橋、そして湯前町の湯前まんが美術館・公民館だった。



アートポリス参加施設のパーパークラフト(兼ハガキ)も配布

くまもとアートポリス見学会

県南コース 10/9 県北コース 10/31 県央コース 11/3

県内に点在するくまもとアートポリスによる優れた建物等や、ユニバーサルデザインに配慮された施設にふれることで、豊かな生活空間への関心を高めてもらおうと見学会を実施し、3つのコースに120人の参加者があった。



新八代駅前モニュメント「きらり」(八代市)

3つのコースでアートポリスの魅力に触れる。

それぞれの見学スポットは、以下の通りです。

- 県南コース** 新八代駅前モニュメント→八代広域消防本部→ふれあいセンターいすみ→砥用町林業総合センター→こども総合療育センター
- 県北コース** 光の森→きよらカアサ→杉田・矢津田団地→花の温泉館→四季彩いちのみや・工房阿蘇ものがたり
- 県央コース** 鮎の瀬大橋→通潤橋→清和文楽館→清和文楽昌道の駅公衆トイレ→清和郷土料理館→サントリー九州熊本工場

※太字はアートポリス参加施設



建築ガイドによる説明

杉田団地(南小国町)



清和文楽館(山都町・旧清和村)

アートポリスやユニバーサルデザインが地域に果たす役割を、実際に見聞きできるのが、見学会。県央コースの参加者の1人は、「以前から鮎の瀬大橋に行ってみたかったので、ツアーに参加しました。予想以上にきれいで、しかもこの橋は地元の人がずっと待ち望んでいたものだと聞いて感動が深まりました」と満足そう。それぞれの施設が地域で果たす役割など、現地ならではの「実感」が参加者に印象付けられた。

また、今回のツアーには、くまもとアートポリス視察者への案内や説明を行うことを目的に今年度から県が募集している「アートポリス建築ガイド」が同行した。建築の専門家でもあるガイドの説明に、参加者は熱心に聞き入っていた。

熊本市現代美術館 (CAMK)
建築シンポジウム

11/28

熊本市現代美術館

建築とは一体何か。建築と言葉との関係は。そして、くまもとアートポリスの将来は…。現在、建築や美術の第一線で活躍する3人が本音で語った。

「危機の時代の建築と美術」をテーマに「CAMK建築シンポジウム」が開催された。第一部では、バイスコミッショナーである建築家・伊東豊雄氏の講演、第二部では同氏と保坂健二郎氏(東京国立近代美術館研究員)、南島宏氏(熊本市現代美術館館長、くまもとアートポリスアドバイザー委員会委員)によるシンポジウムが行われた。

●出席者



東京国立近代美術館研究員
保坂 健二郎氏
1976年生まれ。慶応義塾大学大学院文学研究科修士課程(美学美術史学)を修了後、2000年4月より現職。



熊本市現代美術館館長、くまもとアートポリスアドバイザー委員会委員
南島 宏氏
1957年長野県生まれ。1991年より美術評論家、インデペンデント・キュレーターとして活躍。



くまもとアートポリスバイスコミッショナー
伊東 豊雄氏

市民に夢を与えるのは、ボーダレスの建築

講演の中で伊東氏は、建築が市民に夢を与えられなくなった現状について、自然との関係を断ち切った近代主義の建築が、世界中で再生産されたことによると説明。「様々な活動を各スペースに分断する機能主義の建築、簡潔で明快な表現だけを求める近代幾何学の建築から、いかに脱却出来るかを今考えているところです」と自らの試みを述べた。

そして、そんな伊東氏が描く21世紀の夢の建築とは、
① 都市—自然、人工物—自然の境界が曖昧になる建築
② 働く・遊ぶ・住むが同じ場所になるような建築である。
その後、スライドを使用しながら、ここ数年の5つのプロジェクトを紹介。引き続きシンポジウムに入った。

人の思いが創り出す。そこから建築の全てが始まる。



世界の伊東豊雄を“斬る”

シンポジウムでは、保坂氏や南島氏が、伊東氏の作品や建築に対する考え方を“斬る”形で進められた。「今の伊東さんの建築には、いい意味での居心地の悪さ、ラディカルさがない。昔の伊東さんはどこへ行ったのかと感じる」という保坂氏の辛口のコメントに、「僕は居心地のいいものをつくっていたつもりだけど…(笑)」と柔らかく返す伊東氏。しかしその中には、「自分の内側から建築をつくりたい。身体を拡張していったところに建築があると思う」と建築への強い思いがある。



また、南島氏の「言葉の豊かさは表現者として自ずと求められるが、そこで意識するところはあるか?」という質問に対して、伊東氏は「建築家が言葉で語る時、つくったものとのズレを感じるころがある。語る言葉と、つくるものとの距離が、大き過ぎてはまずいが、小さ過ぎて想像を動かせる余地がなくなってしまう。言葉にすることによって、次に建築がどこに向かうべきかが見えてくる」と答えた。

最後に、南島氏が求めたアートポリスへの一言に対して、「11月1日に県内の大学生と行った“建築フォーラム”は、夢と元気があって非常に楽しかった。しかし、今のアートポリスは誰が喜んでいて、誰のためにやっているのかが見えない。そういうことを話し合える場が欲しい」と伊東氏。保坂氏は「これだけ出来た建築を喜んでもらうためには、言葉の部分で頑張らないといけない。これからは発信が大切」とまとめた。

イ草和紙での作品展

11/23-28

熊本市河原町旧問屋街 ギャラリーアドゥ

個性あふれる作品が、ギャラリーを彩る。

八代産のイ草を原料にした和紙をもとに制作した作品の展覧会が行われた。今年で3年目を迎える同展覧会は、グラフィックや建築などを専門とする「くまもとデザイン協議会」の会員25名によって主催されたもの。期間中は、イ草和紙を使った切り絵やランプシェードなどが飾られ、6日間を通して約100名の来場者の目を楽しませた。

建築無料相談会と作品展

11/25

くまもと県民交流館「パレア」

建築全般からまちづくりまで相談に応える。

社団法人熊本県建築士事務所協会が主催した無料相談会は、建築全般やまちづくりなどへの相談を通して、同協会の取り組みや役割を知ってもらおうと、毎年実施されているもの。改修工事のポイントやバリアフリー建築のアドバイスまで、一級建築士が住宅建築についての相談を受けた。当日は近年設計された住宅模型が展示され、建築や同協会の活動を解説したパンフレットが配布された。

第6回JIA熊本住宅賞作品展

11/26-28

NTT西日本桜町ビル1階多目的ホール

地域と建築文化向上のために。

社団法人日本建築家協会九州支部熊本会主催の「第6回JIA熊本住宅展」が開催された。今回は、県下の住宅作品から応募された29点の中から選ばれた「JIA住宅賞」1点と「選考委員賞」2点を発表。過去6回の受賞作品15点とともに広く紹介。建築を志す学生など、多くの県民が訪れた。

韓国慶尚南道・熊本県建築士会によるくまもとアートポリス見学会

11/24-26

熊本北警察署、新八代駅前モニュメント、砥用町林業総合センター、県立装飾古墳館など

建築文化による交流。

社団法人熊本県建築士会主催の「くまもとアートポリス見学会」が韓国慶尚南道建築士会36名を迎えて開催された。一行は、熊本北警察署、新八代駅前モニュメント、砥用町林業総合センター、県立装飾古墳館などを見学し、アートポリスを通じた建築文化による交流を図った。

県政ふれあい教室

10/23 11/6

県北コース 県央コース

県民の生の声を県政に――。



県の取り組みに関する体験学習を通して、県民から意見を募り、今後の県政に生かしていく「県政ふれあい教室」。くまもとアートポリスとユニバーサルデザインについて10月23日「県北コース」と、11月6日「県央コース」の2コースで体験学習が実施された。県北コースでは、県立装飾古墳館、西合志町保健福祉センター「ふれあい館」を、県央コースでは、砥用町文化交流センター「ひびき」、サントリー九州熊本工場を訪れた。

参加者の中にはアートポリスという事業名しか知らなかった人も多かったが、終了時には「アートポリス事業の必要性を感じた」という声が聞かれるなど、有意義な体験学習となった。

世界へ羽ばたく、くまもとアートポリス。

海外からの視察者



韓国国内の建築家、設計者、大学教授のほか、学生の姿も。アートポリスを通して、日韓の学生による交流がはじまる日も近い



「建築の新しい形や空間の提案がされている」と参加者の声
設計者の説明に聞き入る参加者たち

10カ月で493人! 増え続ける視察者

近年、海外からのアートポリス視察者が増えている。その数は昨年4月から今年1月までに限ってみても493人にもなり、その9割は韓国からの来訪である。このアートポリス視察の一つに、熊本空港国際線振興協議会（会長は潮谷義子知事）が企画したツアーがある。これは同協議会が、熊本～ソウル国際定期便（アジアナ航空）の利用促進を図るために実施したもの。平成16年6月から9月にかけて計7回行われ、大学や建築関係者を中心に延べ211人が参加した。参加者は、新八代駅前モニュメントや砥用町林業総合センター、清和郷土料理館などを見学。特に好評だったのは八代城址などの周囲の歴史的な景観に配慮した八代市立博物館・未来の森ミュージアム、入口までの長いアプローチが古代ヘタイムスリップしたかのように感じさせる県立装飾古墳館、八代海の風が心地よく吹き抜ける開放的な県立あしきた青少年の家など。当初の予定には入っていなかった施設が行程に追加されるなど、アートポリス事業への関心の高さがうかがえる視察ツアーとなった。

海外巡回展



アルゼンチンのブエノスアイレスにあるベルグラノ大学で行われた巡回展ではオープニングセレモニーのほか、講演会も行われた



アメリカやアルゼンチンなど世界各国を巡回

文化交流の促進を通じ、日本と諸外国との相互理解を深めるため、1972年に設立された独立行政法人国際交流基金が日本人の美意識や日常生活に根ざした芸術文化、海外との交流の中で生まれた芸術を、積極的に海外に紹介しようと、海外巡回展「くまもとアートポリス」を開催している。

平成15年のブラジルを皮切りに、平成16年1月にアメリカ合衆国モンタナ州ヘレナ市のくまもとプラザ（熊本県モンタナ事務所）、アルゼンチンなど、平成17年1月まで、4カ国8回の巡回展が行われた。

今後、ニカラグア、ホンジュラス、コスタリカなど中南米の国々や、カナダでの開催も予定。アジアでの開催も計画中で、数年をかけて「くまもとアートポリス」を世界へ発信していく予定だ。

一の宮直売所「四季彩いちのみや」

平成16年3月竣工



阿蘇五岳の稜線に溶け込むデザイン。

敷地全体を公園として捉え、阿蘇の自然に溶け込ませるようにデザインされた施設。特産品の加工場や地元農産物の直売所、レストランなどが阿蘇五岳に面して建てられている。曲面壁の厨房を核に、レストランと直売所エリアを自由に開放的な空間にすることで、来訪者は南側のガラス越しに広がる阿蘇の大パノラマが印象に残るよう工夫されている。軽やかに伸びる白い屋根群とその光と影のグラデーションが、四季折々に変化する阿蘇の山並みを際立たせている。



岡部 憲明氏
■建築家

1947年静岡県生まれ。主な作品は、関西国際空港旅客ターミナルビル、牛深ハイヤ大橋など。

清和郷土料理館

平成16年3月竣工



光ふりそそぐ白い屋根とガラスの外壁。

文楽館、物産館に続く施設として「清和文楽邑」内に完成。地元・清和産の丸太88本を用いた木造建築で、文楽人形の関節がモチーフになっている。雨天でも、室内で薪文楽のディナーショーが行えるように設計され、屋根には透光性の高いテフロンテントを使用。外壁は周囲の自然を取り込めるよう透明ガラスで囲まれ、丸太柱の温もりに包まれた内部に柔らかな光が降り注ぐ。夜は内部の明かりがテントを通して外にもれ、柔らかな表情を作り出している。



石井 和紘氏
■建築家

1944年東京都生まれ。主な作品は、清和文楽館、直島文教地区、54の窓、数奇屋巴など。

砥用町林業総合センター

平成16年7月竣工



地元産の木のトラスがつくる大きな「ブッシュ」。

周囲に運動公園が広がる丘の上に建つ建物で、内部は研修や軽スポーツなどに利用できる集会室がある。内部をすっぽり覆うように、杉材の不定形な架構が生まれ、全体がガラスの直方体の中に収まっている。屋外から見ると、大きなブッシュ（茂み）のようだ。林業の町にふさわしく、地元産の木材とスチールのみを使用した構造。夜間の利用で照明がつくと、闇に灯りが浮かんだようで幻想的な美しい姿となる。



西沢 大良氏
■建築家

1964年東京都生まれ。主な作品は、立川のハウス、熊谷のハウス、大田のハウスなど。